

「医科大学眼科版「白い巨塔」その②(全3号を予定)

途方にくれて逃げ出したいくなりました。しかし、そうはいきません。とにかく再度データを眺めてみます。ここで僕はふと思いつきました「そういえば、当のG教授のデータはどうなのだろう？」そこで教授の結果を確認します。《ゴ〇ウヒ〇シ：年齢48歳・男性・CL装用無し・アルコール量440g（概算で750mlのワイン2本分!!教授、飲みすぎです!!）宴会前の涙液量18mm（正常10mm以上）翌朝の涙液量13mm》なんと、G教授の涙液量は減っているのです！つまり教授の自覚症状は正しかったのです。（「13mmも正常値だよ」という突っ込みはこの際無視しておきます）もしかしたらうちの教授は特異体質なのでは？とも考えましたが、この時の僕は藁をもつかむ思いです。どうやらここに付け入るしか方法はなさそうです。

しかし、そもそも教授の提唱する「飲酒によってドライアイが惹起される」という仮説はどういう理論に裏づけられているのでしょうか？その旨をH先生にメールしたところ『G教授からは「飲酒の翌日はトイレが近く脱水気味になるのだから乾くのは当たり前だろう！二日酔いの朝は誰だってポカリスエット※①が欲しいものだ」と説明がありました』という返信がきました。確かに二日酔いになるくらい飲みすぎた翌日にポカリスエットというのは定番ですが、お酒を飲んだ翌日がいとも二日酔いということはないと思うのですが…。教授は常に二日酔いでいらっしやるということなののでしょうか？あまりにも乱暴すぎる教授の発言にビックリ仰天です。

一般に涙腺からの涙液分泌については自律神経機能の影響が知られていますし(交感神経優位で涙液分泌低下、副交感神経優位で涙液分泌増加)顔面の浮腫(いわゆる顔のむくみ)で下鼻道付近の軟部組織の浮腫による鼻づまりを生じれば涙道下部が狭窄し流涙症状を来たすかもしれません。また、交感神経には日内変動と精神的ストレスの影響もあります。無論、G教授のおっしやる脱水の影響も無視できないかもしれません…。と、ここまでザッと考えただけでも涙液量を決するための因子が非常に多岐にわたることに気がきます。「うーん、これは困ったなあ…。どう考えても全てを網羅するのは不可能だし、

そもそも誰がどのくらいの精神的ストレスを貯めているかなんてデータ化できないし……しかし待てよ。結果に影響する因子が多いということは、逆に言えばどんな結論だとしても様々な要因を《こじつけ》すれば理論的には筋道を通すことができるんじゃないか？これは何とかかなるかもしれないぞ!!」では、今回の結論とは何なのでしょう。それは①全体の傾向としては飲酒で涙液量が増えた(もしくは変化なし)事と②G教授(とほか数人)は飲酒で涙液量が減った、という二つの相反する事実です。つまり、この双方の結果を成立させるような《こじつけ》を考えることが最終的な私の使命だったのです。何がポイントになるでしょう？止むを得ず毎日お酒を飲みました。(念のために付け加えますが好んで飲んだ訳ではありません。)そして綿糸法を施行しました。僕の測定値は常に13mm前後です。多く飲んでも少なく飲んでもあまり数値に変動がありません。何のヒントも得られず悩み続ける日々でした。「G教授が他の皆と異なる点を探せばいいのだ。それには気付いた。しかし、それは何だ？眼科学においての優れた臨床能力か？研究能力か？そんなことは十分に分かっている。それと飲酒になんの関連があるというのだ？大学教授は皆、酒好きだということか？本当のような気もするが…。CLは使用していないし(眼鏡は使用しておられます)年齢も性別も他の涙液が減った症例との統一性があるとは言えない(他の涙液が減っている症例は若い女性が多いという結果でした)注目されるのはやはりワインのボトルを二本空けている点か？ただの飲みすぎじゃないか！」(次号に続く…)



携帯サイト用QRコード

<http://www.fujita-ganka.com>

※①ポカリスエットとは…大塚製薬から発売されている清涼飲料水。日本においては同社の登録商標(第1574161号ほか)である。日本におけるスポーツドリンク普及の起爆剤になった存在としても知られている。略称は「ポカリ」。開発における商品コンセプトは「飲む点滴」で、ヒトの体液に含まれる7種類のイオンを含有する。カロリーは100ml当たり27kcal。



Fujita Eye Clinic

藤田眼科

042
(645)
0575